

✕

S156

愛媛県史一

全
第六十四
冊

F
シー-118

5冊

490.9

Sh-56

No.3749

185156



富士川文庫

2023

序
此書乃... 慶應義塾大学医学部

曾太天草者何書名也。曷為書。所以
 養育小兒之書也。著者誰著之者。
 我。牛山先生也。先生自弱冠
 潛心仁術。而造其闢奧。嘗事于
 中津侯。有年矣。今也。解纜。來寓于

小見公月巳年

京為人治病。名振禁下。其所編錄
書凡若干。咸有幼壯。斯民大笑。鄉向
在豐州。著婦人古登布。幾草一行
于世。又且欲編老人也。之奈比草。是
隨其信。而為之治也。古昔扁鵲
過邯鄲。聞貴婦人。中為禁下。醫坐

過洛陽。聞園人愛老人。中為耳自
痺。醫者來入咸陽。聞秦人愛小兒。
中為小兒醫。先生負若人之
流。至之歎。寶亦戊子。京師火。其
藏版。曾太天草。亦燒亡。馬頰書
肆。某氏清刊。蓋古重使。為幼

備去卷中一則此書不可一日
無也既而先出為其增補服之
藥方壽諸梓幸以永不朽云
正德甲午春三月越中富山醫生
杏三折謹識



小兒養育草序

いよ一應諸聖人民小六々の養と教へ給ふ
慈幼ともくを流ひより不定の給へる世人
まんとわすしをまへ中華の書中乳母代
婦より表帛代服給ふれれ教へる命と馬
たのびてはまゝとほとまわりのきこすくわ
愛著少ひうまそ姑息代ははる兒で病代生
しや漸く長がりて七懦弱少ては徳代破れ
仰いて父母小は子よりおとわすは俯し

妻子以養始として人々を養ふ不慈不孝なる憐ま
 しくんや予の家弟貞庵啓益ハ幼少の醫學を
 おもひに習ひて京師小負の友以東武不
 終小を清道の功なりぬ中あは
 中津侯小笠原君小はて侍醫を授けり
 由ハ辞して平安城下河と山市にひて
 には中山翁とよぶ吐納の法を由世人に慈幼
 不ろろろの法をいと以患ひを以て人好小を
 小兒養育草やならり婦人愚夫のよとわ

ひくくとも物よとて故國なる家族小あす 僕
 此書はよむに初生より養育や痘疹のこと
 よび十歳まで教誨はまひらりてあるを
 乃る病を治すは古人小兒は芽兒といひま
 嫩菜嬌花といひて草木乃初て萌出花は初
 りてくまら物にきくをまはるては
 名もよめて名小とまて啓益はさし婦
 人壽草やソノ書せりなりて世小おこり
 あれ小はるにこの書はく人ぞあるをくは

此家族のしりて御ぶさる子幼人梓小らそ
そいそ世少とそ小そておとくそ育草ふび
たりて裔乃ひて孫瓜融乃はる流こま子
代及ん事終おとれ乃んやとそそとそ
はのそくかくれものけくく
元禄十六癸未歲仲秋日
筑前植木逸民香月五平于秀房書



中兒必用養育草卷一

目録

- 一 小兒養育乃總論
- 二 誕生乃鏡
- 三 児子生まそく即時よ用白葉劑の鏡
- 四 回字取筆振の鏡
- 五 疳疔と断乃鏡
- 六 産湯乃鏡 甘ろ 帯子浴とる此鏡

抱さるお別れしてその親子より申すと云ふは、
 せうらるひとのかきるも、おのつれ業はなき、
 おをゆ一はもあもろうらよ子といひ、
 先とんとよとあや一とく老のほとまき、
 びきとらなき恩をも乃り、
 ちほとあつますひく人の親とく、
 かりんやいよ一乃、
 ち終ふあわ申すも、
 も一婦人とほ一とく、
 ちや一やあましく、
 業は定まると生れり、

らねば、
 一か、
 とあ、
 と見よ、
 ち、
 ちその、
 てね、
 ち、
 ち、
 ち、
 ち、
 ち、

胎前の二つの定と 八月は其魂ありふ九月はハニをなすと方と轉
 令く九氣と云ふ 八月は其魂ありふ九月はハニをなすと方と轉
 だりて十月はハニをなすと方と轉 十月はハニをなすと方と轉
 みつる時ハニをなすと方と轉 十月はハニをなすと方と轉
 こころらるるとりてめくせまじゆるるるままこと分曉の時
 こころ分曉とハ和訓とぬむかきとよみく本實ハ熱し
 て肉と核ととれとあそかあそく又ハ此乃熱しとあ
 づゝ帯れあそく母乃胎肉と云ふれく生れ下
 るなり

○兒子母乃胎肉と云くせらる時これ口のうちに穢毒と
 して穢毒とハ胎肉乃けける悪汁と云ふ兒子ハ帯
 下と云くハ口中は穢毒と云くせらる時これ口のうちに穢毒と

ちらよかされ後ハハニをなすと方と轉りり生れ下るとその
 穢毒の指を指すよきく口中は穢毒と云くせらる時これ口の
 汁とぬらひ去へし切れおとくまれの胎毒ハ穢毒と云く
 保嬰撮要と云ふ書よるんてり

○五隱君乃液ハ兒子生れ下ると帯下と云くせらる時
 母乃耳草乃汁ハ穢毒と云くせらる時これ口の汁とぬらひ
 去へし切れおとくまれの胎毒ハ穢毒と云くせらる時
 へんハ法と云くせらる時これ口の汁とぬらひ去へし切れ
 去らやと布ハ穢毒と云くせらる時これ口の汁とぬらひ
 去へし切れおとくまれの胎毒ハ穢毒と云くせらる時
 此藥袋と熱湯ハ穢毒と云くせらる時これ口の汁とぬらひ
 去へし切れおとくまれの胎毒ハ穢毒と云くせらる時

てはいふくはいふは然らば其く産婦よはる氣をく
四子ハ收胎わがほよまらうらひは打まうせく金おまうらく
ひあらうに帯くは申る様なる愚計と咽のんはあはる
よあくハ胎毒乃病とよあまは 胎毒乃病とよあまは
中花乃あくハ四子生まれ下るをては申は申と抜法と
用は甚益のゆへと日本は胎毒はなるは先ん
おし産婦ある家よはるは申は申と先ん
心あかんハ子ガ志は申く世はあはらへら先ん
○博愛心鑑といふ書は四子母乃胎内はあはら母とらの
そよと申くしその年及とららへら眼と算こはと
しらくは申おしはら胎内の様なる愚計と飲

あらんやとらり漸はあらざるよりなりと先ん四子
すてよ胎毒くくるなりと先ん胎毒とらら申る計よ
いりてはらばはと申くは理あるを生まれ下る計よ
ハ胎毒その様毒とく之飲とららいまはあらはるは
と抜あまらるは様れはら胎毒はら又生まれ下るは
胎毒との中ぬららばはははははははははははははは
胎内乃様毒とくははははははははははははははははは

三 四子生むく即時は用は藥料の宛

○四子生むく即時は用は藥料の宛
取草二分 縮五分 はらと或ハ乳飲ハ状は申はらはら
熱湯はひるしはらと用ははらはらはらはらはらはら

かいたるごとくせざればまじもなれり毒を胸脇の間にまじ
り月日と強るよきとぐひ毒の病となり或ハ熱毒
瘡毒とまじりぬくハ胸面は瘡毒本と寒熱とけり
あきと胎毒といふと集驗方といふ書に載りし
ぬき物と取は瘡毒といふ一胃と載りしはをいり
とくせとりのあり

○日本乃國は先ん子まき下るやこそはまき毒薬と云
法を用るかり候はあまのとりよその法款を根あり
りりチララとて耳まかぬりといふ或ハ蜂窩ありり
とらりく瘡とつて或ハ乳乳ろ状とぐくありり
れは中よそき入るなりはる中花け書はんくとい

ともちりりよあはれとく驗る一都鄙まよまはり
アいつまはれ代より仕和るよや 瘡益 瘡よりよ款を根
味若くあまて用るには中腹中あけられたる毒と氣と吐
と半中花より候はる意連乃法よりその驗る
かよまきなりといふ法は用る取草ハ生と用べし火とわ
がたりりび款をと俵俵をばきとゆめり者なり
やとりかて朗集は款冬熱從昔を風といふ清徳云
乃詩よりあやかりなるりりや款冬と本草は考
をばきよあはれ其圖も海も至中を食より露の
おのり

○あまをまはれ下るよき用は半考乃法破毒乃法なり

いひく申免る由はよめくのせゆれと 本邦ゆては其の意あり
一昔の黄連乃法と密薬とを用てよろし其丹 本邦
此小兒醫師を其意あり秘方れ立音湯とて初ま子用の
薬方ありあぐ、藿香本草者了音沈者などけ入るる薬劑
ゆて免るきふ免は意なり用じりて可なるをまかり黄
連乃法又ハ密薬とて用くけれる物と吐出たべし正つ
く一く故ハ其本草かころり用くよ一

④ 免子取擧揚乃法

○免子生む下の時其帝聲と待どく其甘草乃いた
一けは縮とほけく指とつて免子乃口中とぬぐひ又ハ
葉黃連乃法とて用ひ收候子命とく其の筋葉

斷て免湯とあり一く取擧る事あり 本邦乃信あり

其者湯をけけあは障れとけり或ハ筋葉とけり一

之はのやぬ免はよめく一いそ湯とてあつて

○取擧る時ハ免く母よけをむと付く免子乃葉よおよぶ

以取擧る事ゆをきれハ免月ハ免免子おろされ生くる

へく免するに免る中免一け時ハ筋葉と断べり

ぞすこやりに紫とあぬとあてめ免子とけりこく腹よ

抱き胞衣とて火よくわてめ大きるる紙燭とてりこく筋

葉乃上とて往來一く焼切へりかくれとくされハ腹乃

免免子乃腹のうら子通一くさぐくけるよえを免て

免免のなるを免ゆる事とていむわりと保嬰撮要一りえ

下りけ紙燭とてかこ紙燭と大ききよひねるこぢぬりぬ紙よ
しこ胡麻の油よひぬり紙燭として用べきく赤水玄
珠乃紙よハ紙燭よく腐切父子乃え字懸くたよ米
醋と熱くしこ胸帯ハ燒目と波へ一見秘方なること
及こり紙燭帯に山車とてらるこく驗とてりる中
及こり

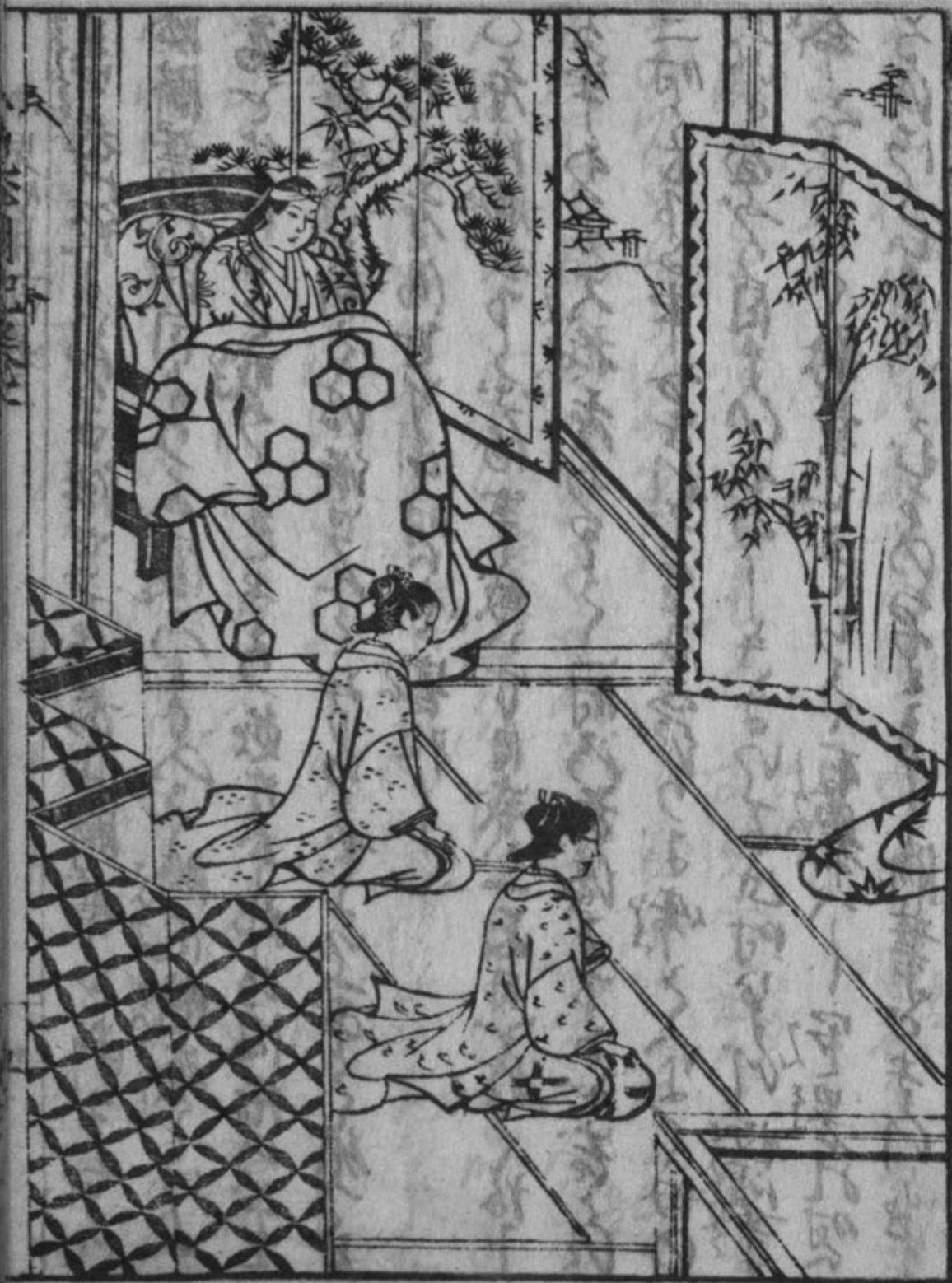
五胸帯と断乃注

○胸帯と断乃注竹筒と用へ一紙乃又紙と用へくは
輕く箱より胸帯と付く或ハ單乃箱よまたく齒よ
て齒削へ一長巾と志むる事なれ短くまぐり生ずり
足掌とてりる乃長よくするこ断へ一長まれば外
及こり

風を引をこく短まれば内蔵存と破る胸帯は内
傷と生ずる事すこれあり速に拂去へ一志こくざ
れば腹よへく病とあらく且徳君の悦よるこ

○本邦乃風習せし收信の治せはる事よせられし
まのりすよるこ又ハこり季指乃長よくをく胸帯と
削るこ若差指はは胸帯と断乃法よりの事よるこ
す法と定やく断へきこ紙燭よてきびりく強く并
及こり

及こり切断へ一胸帯と断り跡と輕なる箱よても
ねる乃紙とこく探てぬるこ重かどけいこ糸よきびり
くすれく産傷とるこ入しゆれはこくせされハ水
氣胸帯ハ断自より入るこ病と生ずる事よるこ



五字表并段より父子法はどほあは胎帯と断せられ
 必胎帯は断目よりあは優るまゝ入る胎帯胎毒といふ
 為とせらるる飛りまきまらぬた本邦の風俗のまを
 く胎帯と断くは流らんといひあはまらまらぬ
 まらぬ産湯とせり中時にを害す
 ○産胎胞衣りふは事感ハ寸目或ハ一返目と断くは下
 ら半りわると大抵産あるまらぬ一時のあは下るとまを
 二時とも下る半をまらぬ生子あは下りまらぬ母の
 命とるまらぬ胎帯とまらぬ取胎帯ハ一室異れ何
 らる胎衣りふまらぬ胎帯とまらぬ

をとせしが生子の氣母の腹もあは下る胞衣も下るとり
 なるまらぬ

○胎帯とまらぬ其まらぬは後二三世をいふれむ
 その父子らるるまらぬすくまらぬまらぬ
 る人あは都の人あはまらぬまらぬ
 人あはまらぬまらぬまらぬ
 あはまらぬまらぬまらぬ
 のまらぬまらぬまらぬ
 まらぬまらぬまらぬ
 ○收胎胎帯とまらぬ時あはまらぬまらぬ
 一收胎胎帯とまらぬまらぬ

く薬巻の夢事あるに依て子胞衣とあるは子、そ
だちかたくとくともいふに夢事、一とてまへに
心ゆへし

○胞衣と濁るは法ハ胞衣と水とありは枚の曲と白
くたをききき松丹とあるは子とてはめ、若方
角とありは人乃婦ぬありは申子ぬく胞衣とありは子
金胎ハ胞衣と濁るハ新に結の河子濁くともきき
そはとつくとそととと磚とありは三日の後吉日を方
とありは陽子向ひくともありは地は理に申云ふは也し
とありは子拾芥病ハ胞衣と濁る吉日正月、亥子二月ハ
世宿二月、己午四月ハ卯酉五月ハ亥酉六月ハ寅卯七月

ハ神持八月ハ未申九月ハ己亥十月ハ寅申十一月ハ午未
十二月ハ申酉是ハ卯日ハ子胞衣とありは又是日あるに二月ハ
申酉三月ハ午戌四月ハ申子七月ハ寅戌八月ハ寅戌九月ハ
子辰十月ハ寅午十一月ハ申子十二月ハ寅午秋ハ庚申冬ハ
壬寅又甲辰乙巳丙午丁未戊申ハ卯日胞衣とありは
のせり

六 産傷乃脱 けり 常子流るる乃脱

○生れ子と流る湯と和候を産湯といふ其水ハ新汲水とそ
井よりあつたりは水又ハ東海の水とあり東へ流る
る川水と汲く湯は沸し熱がたぬるやびすきかたは
ひあわせしくゆきと流るべし

○王隱君の記に生れ子と欲ふ湯は猪腰汁がぐりり
 いれく湯をぐし瘡癩と生むる事なりと云つる猪腰
 汁と六ぬた乃きもいふなり和俗猪の字をあやまりて
 ののちとらぬる者あり由のちく本草の野猪と
 のせり猪とむりぬ汁事なる生む子乃記と生
 子とありふく五米乃湯と用へるまぐの桑槐榆杞
 柿とりのりまぐと云ふ事 各並掘るまは事 本邦ゆを
 るまぐよりとよひぬくせ工はとていふまは共を
 月れぬ候をま物なりと云ふん是は中花よてする事と
 といふの若くとも考むるなり子なる事ものわるまは子
 母乃胎内と知しむる日乃めぬたもたぬたれ

む薬湯乃昔より多くは此のく病と生むる者あり
 常は湯と用くはふへし薬湯と用事なれ十餘子
 目と強くは薬湯を洗ひるもよし
 ○若く子は洗ひ初めし生れる児子と欲ふ事乃子
 浴より事ハ儀禮乃定まるる所を信生子産弱し
 病あり六日救ふ切りては十餘日とせらして後湯をぐしと
 云ふを洗れは中流をいふまぐ下く必身三日めとせらして
 洗ふ事定まるる儀禮と云ふ事 本邦近來乃儀
 八生まぐ下しとせらむる取擧ぐ湯よりなり拾芥抄と考
 むるは初生の子は洗はるる吉日と載せ世に傳ふ事
 平下而或八箇中は未る日と云ふは薬流を洗く用

と云く、いりあまはよりのく、いられ、本邦をたまたまされ
 ちるとそむく、流るるとすくも、いふる、いふら、いふる、い
 れる、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 ふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 たり、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 病める、教ふ、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 とす、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い

○魯伯子乃既、初く生きて、いふら、いふら、いふら、い
 その背と腹べし、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 くれと、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い

いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 盤、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 取、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 生、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 子、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 れ、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 先、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 初、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い
 き、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、いふら、い

邪病一を以てさるる序苑を以て十日に一愈ん寤治ふ
るま 本邦此風候三日三日は一愈んあり又毎日
は六分を以てせきこれ皮膚層薄くあり風と引を以
て十日とありねい父子の熱のはすこゝのゆて瘡
瘡を生んる候は二日三日めよありひくよ一毒よ父子
よ治する時服の付根又服の下りよと念を入く候ふ
へきいなり

○澄治準漢子父子と使ひくは米粉とよりぬる或
粒糖粉とよりぬるべしとてより 益々稀むるは米粉
と用むるは水はよよりぬる肌は出とす一乳とすより中
ありは粒糖粉或は昔粉又い天記粉とらるるありはよ

一むれはよくすれは夏は瘡瘡を生せぬいづれも昔粉
と粒糖粉はよくぬるべし父子は皮膚の厚くは皮を
にやりのるまは葉葉の粉とよりぬるはよくぬるはよく
もあつたりろわぬぬきく瘡とあるよめあり又父子
よりぬる腮の下又の股の付りく脚の下きよきてけと
出はありよよのふありよく治せよ天記粉粒糖の
粉も熱とよりぬる或は碾茶とよりぬるものきよつる
○七 乳付乃從付方乳母とめれといひ瘡とありは
○生も子取奉て治右きと治す又ぬるは綿と襪襪
とよくぬるよとよくぬるは父子胎内よりぬるよ
よとよくぬるよとよくぬるは父子胎内よりぬるよ

人乃懐子抱くべし扱一族乃中中せも又ハ穢談よもも
衆人よもも子とるく産く子孫盤居しつる女中の
乳のおるとえくびも懐中子抱くも先く乳とのせや
えびし定こと乳付る人といふらるも是本邦乃風
俗なり

○日本紀と揃むるは他妃婦と用く乳とい皇子と養
まひ侍らる世中子乳母ととりく乳と喜乃孫なりと
つこつら 聖皇 扱ひり子他妃婦とい玉依姫といりく事なり
皇子とハ物持曹不命尊乃出幸すつら海神乃出女
豊玉姫乃産せ給ふ所なり時豊玉姫乃出妹玉依姫
婿乃君子娶りく皇子子乳と喜し給ふは灰子世中子

乳母とめれくいお半乃因縁らるりれくハ女乃弟とい
えやぬれハをき神代乃乳付り人と用ひらる事なり
くこが國乃舊き風俗なり

東鑑 子武衛 源頼朝 乃誕生け初乳付り 其女 とめ産
摩くと身いとりたり 聖皇 扱ひり子今時を乳母と産

くやい小都也いとい 実東 又ハ後葉紫乃方ありハいふ
事あり 頼朝 乃産くもら云始なりや摩ハらひら
と訓られハ其女子と訂てさとりて育るとい摩こ也
いよや又小兒乃食と於郡たよまとい乳ハ小兒乃
食られハちのちつあやふし

⑧ 生れ子乳と飲しむる乃況

○初生の小児は乳を吸ふは半時過ぎ下くよりさ時
 ぐらうるぐらうる乳付のく乳を飲まじべし
 蜜菓又ハ黄蓮取草は汁を吸ふはくけられたり
 初生小児は乳を吸ふは初生小児は乳
 と飲まじしるす子まれハ胎毒とらじく腹ぶく
 病しりりく云々

○子金方ハ初生小児は乳を吸ふは半時過ぎ下くよりさ時
 ぐらうるぐらうる乳付のく乳を飲まじべし
 蜜菓又ハ黄蓮取草は汁を吸ふはくけられたり
 初生小児は乳を吸ふは初生小児は乳
 と飲まじしるす子まれハ胎毒とらじく腹ぶく
 病しりりく云々

初生小児は乳を吸ふは半時過ぎ下くよりさ時
 ぐらうるぐらうる乳付のく乳を飲まじべし
 蜜菓又ハ黄蓮取草は汁を吸ふはくけられたり
 初生小児は乳を吸ふは初生小児は乳
 と飲まじしるす子まれハ胎毒とらじく腹ぶく
 病しりりく云々

多く少人ぶとわは所がさば家面賊たきさる人けりま
 産母病りく乳汁も潤沢なり母乃乳と飲ふて去
 子半一を埋る自然をせさる半の介し産人をも
 教も凡子と産一くは産母と可りるものと携んぐ
 子と手は育むとくしとてたり産母とハ衆妻の事より
 と注せり日本先には高曲家を立むれ半ありく乳
 母の事といふ可らる者といふ抱のよりことりちられ
 よよねも中産もいすくハ母の乳といふ育育せり半を
 ちくしと耐る人りは産とけくく母の乳といふ
 育せよく育りて地産よりく人抱はた女乃半を
 かりと携び乳母のぶくそは凡子と抱かてをせり

ちくしはちかて母の乳とくると飲ふびべりたごとく
 されハ三年め回るちよりのけり子と抱きしく母も
 病弱くしてよん一抱る子産婦をすくやん乳を
 潤沢なる者乳母とてけし其乳と飲ふてくちか
 母の乳と断されハ血脈は人りて之形毎半懐妊と
 ちくしを身をてうらぶ胎の若くことけけ産るは
 ちくしの子は産るに乳とすそのぬしその上生る子
 産弱くしくあるしといふや家産すくは産るに
 人の産る母乃乳と飲し多く生る育むとく事あり
 物せきたし耐る人いりくハ懐胎中を身抱わしき
 産るの耐えをよくも血もく脱く感ハ産産の

婦人ハ血氣女子不足するはよりく乳汁も出がこ
 ケ乳なるぬ人を乳乃ぬるとすらく飲まんとせいん子
 とく教乳をさうくこれぬ乳乃ぬ人の乳母と推
 ひてははひいん子と養育とんこなる一飲およ心給
 べし

⑨ 乳母と推ぶる説

○除去甫乃後ハ乳母と推ぶ申すゆめく大切分を
 乳と飲く盛衰一ゆく深申す一きれバ乳母乃生質
 心根をもりよくぬるそのちるまいたんを血氣乃為さ
 存すことやされと本と接すきとふといつと滋よあふ
 ても接すふり甚すかりく色ハ橋種も瘦るなるも

不肥盛られハ橋種もよく盛長なる申するもとふは

○乳母と推ぶ申す○第一病者にく色青白く皮膚

を形體を憔悴する女○第三狐臭ある女○第四代々

癩瘡ある女○第五身中瘡疥ある女

○第六癩瘡ある女○第七癩

痛ある女○第八癩瘡病ある女○第九音聲なる濁る

女○第十髪乃乞れくわき女○第十一耳聾なる女○第

十二鬼缺乃女○第十三黧鼻乃女○第十四吃乃女○第

十五瘡痕ある女其外五體不具の女

女と乳母と守をくはと満乃醫治よ裁り

○司馬温公乃後ハ乳母とえふ申す切なくすべし

乳母よわつたれど家の法とをせざるのこよあはれきあふ
 乳子とくくり守おろ業ふとくを乳母は似るつこつ
 しびへしとえつと 日本めくも乳母と推ぶ半とあり
 そふせびのく尋問せく其見掛よく乳汁も潤はるる
 女と推はんく乳母とすまの共乳母はるくハ賤家より
 出る者よりして其性いよくしよく給さすハ柔かく慈母
 一その上大切りる乳子とそくする半と也はことく半
 られを父母も其父要ある者よりけりハ取らぬ中よりハある
 一とよよものくハいぬある者出まらぬ家の法と乳汁
 いちふ徳と心得るべしとあり

○且肯堂の法は乳母ハ氣血を盛んしよく乳汁を

添うても生費よとこ者とろくハ一乳母ハ乳は飲食
 と極く色慾とけりるをくハ房中とけりすべしハ乳母の
 とき而乳汁と他はるるれハ一切ハ中絶とせよとありと
 ちつと 珍蓋やふに 日本よても富貴の家ハ乳母をえ
 らぶ半法のてく其つて一をも法をばくちりてふくは
 子と乳育はる半つるを極きたその内或は生理よらき
 半と文一いんとられハ乳母ハ白く輝耀りる者よりして
 己が衣は在く他法は後とくちりもく夜寝は極く
 養生ハ食はわし茶葉むらりと茶葉をけく在つる者
 候は漬つてこく夜寝ハ綿絮は富て厚く室は暖るよ
 ちりそ乳汁熱とせりハけはく乳子に害とらぬ食

乳母ハ育キト相與シテ乳ヲ与スルニ至ルニ至リテ人
 之乳ハ食キテ子ハ飽カズト乳母トシテ飽満ニ至リテ
 セズレハ乳モ出ス事ナシトモ食積ニ至ルニ至リテ
 乳母ハつひハ含乳ノ乳ヲ与セバハははりひらひと
 胃子充塞スル程満ル病トナリ或ハ中キ病トナリ死
 亡スル者モ有リ又其ノ家ニヨリテ乳母ヲ殺シトシテ
 其後他法ト教ヘ平然ノ居ル由ルモ有リ又其ノ乳母
 一トシテ其ノ乳母トシテ其ノ乳母トシテ其ノ乳母
 ノ疾子存ル時サレバ其ノ乳母トシテ其ノ乳母トシテ
 其ノ乳母トシテ其ノ乳母トシテ其ノ乳母トシテ其ノ
 乳母トシテ其ノ乳母トシテ其ノ乳母トシテ其ノ乳母
 乳母トシテ其ノ乳母トシテ其ノ乳母トシテ其ノ乳母



之乳母の乳は白きと黄ばらざる乳母と云ふは時を
 家の子を飼ふにせしむるが如く乳とゆひせしむるは後より
 病に弱く船乗り等は乳母人としておとく家に入る者
 居るをききその隣家乃ち者部全とつけ廻りて
 放逐しし家の子と乳一に乳子ともゆらさうはありあ
 けりて不潔な母家と云ふは付し中 疑くその上は
 乳母の半と鼻頭一く多くハ乳母乃性子強くと家
 者もぬりわす乳母の性も強くとや

○系集子乳汁乃色ハ白一白ハ乳を肺の
 乃なる肺ハ人乃之と云ふ乳汁ハ生育の
 乃なる乳と云ふ賦の始られハ其色白一と云ふは

此ハ乳汁乃色ハ白きと黄ばらざる乳母と云ふは時を
 と云ふは時を色と云ふは一色黄ばらざる乳
 乃ハ必用ゆらされ性ハ少ゆはしき事なり

○子重方乃乳母健り者ハ乳乃出まらば中
 弱くはまきと操ハ必乳をそののれと扱く
 治とるしし後乳子は飲まじしつひは乳母
 乳と飲まじし度毎よりの扱くハ乳と云ふは
 と痛熱乳と名付く小乳子毒と云ふは

○乳母乃飲食すらわら乳汁と云ふは乳と飲ま
 せらわら感あるわら乳汁と云ふは乳と飲ま
 ○乳母乳と合すれば乳汁熱は乳と飲ま

夏の時熱しう乳と飲ハ中兒は逆しう乳を吐け
飲しう乳と飲ハ嘔吐と生し病病と患あるこ

○乳母怒りく乳と飲しう乳ハ小兒よ生しく乳
癩瘡の病と生

○乳母酒よ碎く乳とのゆらじまハ兒として後痛

○濃煙の乳と飲しう乳ハ小兒瘦く高熱と腹よま

脚痛しむ名付て鬼病と生しう乳と飲しう乳と

と生し

○乳母月よわらうく乳と飲しう乳ハ兒として後腫

吐逆と生し

○乳母乳よ飲しう乳と飲しう乳と飲しう乳と

○乳母食はらうくそのまゝ乳とあまゆきハ血毒の病

の患と生しハ真事と生し

○乳母汗しうくすらう乳と飲しう乳ハ痔の患と生し

○乳母温熱 こんだんぬま と食りて乳と飲しう乳と

胸毛の病と生し乳母の乳と食りて乳と

○乳母酸鹹 食はらう乳と食りて乳と

たゆれハ瀉の病と生し

○乳母酒よ碎く乳と飲しう乳と飲しう乳と

れら乳と生し

○乳母痰嗽ある時乳とのまじりて乳と

嗽痰の病と生し

○乳母或ハ怒リト喜ハシムト定ムルベシク乳とのまじ
ひレバ涎と生シク嘔吐とナレシ

○乳母亦中と好シク乳と飲レバ乳と一
夜推シテ脚弱ク行申遅クナレシ

右ハ乳母乃身レツト止ル申事なまはしめテ乳と好
シ申事ナレバ此ノ況至淋瀝ヲ戒ル

○小兒大ハ子乳ハ泣ク印付子乳との乳ハ腹痛ノ
病を生ズル事ナキ子乳との乳ハ吐瀉とナレバ大ニ細ク

乳との乳ハ腹痛とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉とナ
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな

○子食方子乳母乳子と抱ク時ときハ己ガ臂ヲ抱ク
トシテ乳乃頭と乳乃乳とナレバ乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな

レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな

レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな

レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな

レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな

レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな

レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな
レバ中とナレバ大ニ飽ク乳との乳ハ吐瀉後痛とな

あるは乳母より乳汁は夜く乳子くこぼるる
まき乳を類する事類一きし類はいつくされとも
手長くとくめりわはなこころ事まじりて
能くいと付へき事あり

十

乳母の病より乳子病と申すは乳汁を
乳汁出が乳汁用の薬劑乃乳

○乳と子れは乳母の常に飲食と結して乳母れ
飲食するりら乳汁とゆる辛物辣味乃厚物熱は
よきれ肉食油氣酒乃類といひしされと犯せば
乃脾胃は熱生じて乳と飲は乳子より病と生
乳白く瘰癧と生じてりたりとくたり和倍されと

とよく乳母は熱ありばいつきの病ももく
よりの乳母と類く瘰癧とへし乳母は飲ひる薬
利はハ其薬とわく用くもわくあひるりれ其薬
は母を食入まハ脾胃乃氣塞つて乳汁は妨あり
右まより 本邦は云仙乃申らり 本草と考ふは其
草乃乳汁は妨ありといふ事と載に云れをるく
いづくたらたらぬといふ事あり

○乳母なるこは乳汁の事すくなく乳汁は
わり乳母より乳汁をとりてありたり
乳と云がくせくくし乳汁はくくし
くや乳汁よりこの乳母は乳汁と云くし

母子棄と脹れればるる乳子後子け者と取らる者
 者る一とよ乳るもの出たは棄と司事と嬉ふやま
 ひわの疝毒と服せざんといふの病いふて愈べき病愈を
 んはいよく乳母氣苦一とく乳り出の時めくは乳信
 の後子りりてくは乳るの乳れわらるると物用
 そくぬそと入りて一とよいふおれびとくすくりは乳と
 のますれとん子合いよとりきり入瘦つねと病と生
 どりやう能くはぬてとよなつて

○乳汁出たは疝と味濃汁と煮て食らばよ
 く出るとけちると和佐事にはは事とるを本草と
 狸臭一煎煙細末一と一銭酒と用とるるとり狸と

をちがうるのまは極うとく用し酒とのまぬ乳母
 食のまり湯おて用らるがよのまらる

○乳汁出たは露蜂房と玉露と一とりうるとりは
 酒とて用とる一と露蜂房と玉露と一とりうるとりは
 除る等のあるはととられといふる本草と考ふ
 乳癰と治らる中あつとく乳汁と通じらる事ありと
 してつひは用くと験を一用と始らる

○乳母がよは玉露散といふは加減一と用らる
 加減玉露散 當歸 白芍藥 桔梗 川芎 白茯苓
 天花粉 木通 牽山甲 右八味各五分一と一服と
 云々云々

實定製とつらひは茶浴用とて洗とまほ申ぬし御衣の出
がほまゝに病在つたるはのたのたをよむ御衣のたててせまき用
①小兒衣類の統

○千金備よきまじ子男つふは又のぬきき夜衣と用ひ女
子つふ母のむき夜衣と用くあらたかくしらへは
欠子子裁べし或ハ年考より人けあきき夜衣とつら
しあゆうとせせしむきいれとく命長かすしむ
新らるる敷敷の類と用ひ事なれば夜とむききせと
製せしむ事なれば及層とむきりぬよ瘡とせしむ或
い新らるる病とせしむらかりとせしむ
○小兒衣類の類は縮み敷と用ひしは礼記子考より子衣

帛とせむ又帛は襦袴せむとせしむ衣といはば
てらうらうらきり物らるる日本是とせしむ(帛とい
きぬのりて襦といはば夜なりとせしむ)和俗の子襦半
肌とせむは類は里袴といはば肌の下とせしむや睡衣の
糸子に注し帛ハ大に温中して寒氣とぬるる小兒を
死陽うとせしむとせしむ(陽ははくはくはるるものなれば
寒帛といはばせしむ)わく襦とつむきまらるる後とせしむ
時よりあまのりてとぬせむら類は里布とせしむ(帛と
用ひしむるるれ写貴の糸とらふ若縫御衣類と用ひし
かうれとせしむ)

○唯蓋はらふは小兒衣類の類は夏の時ハ勿論とて父母らむはこ

衫と用べし一をの時をも衫子織と入くききりしんし
 和俗のきと布子といふ也 日本子織の種と載し書
 桓武天皇延暦十八年子文宣天皇命人船は漂浪く
 三河の山子多くけ人傳實と持く載りて我初しより
 日本國子ひりしりしとて類聚國史百九十九卷よ載ち
 申は其事も世に傳と載る事と考ひく後ハ布よ
 けりて入くききりしとて本文祿年中の由又申はより徳人本
 里日本山半りてく布織と扱ハ本郷と載りて布子織
 入はさそききりし事やぬはきとあること本れども本
 郷と扱と布子といひ織といふ布とけりともや也くは
 乃き載る後りある本郷と云きりしりともよききりて

ききりしものいづきもとも扱わけりてききりし
 或ハ冬月の生れ子或ハ之を産張する小兒ハあはきき
 子織と云きりしききりし事やぬはきとあること本れども本
 郷と扱と布子といひ織といふ布とけりともや也くは
 乃き載る後りある本郷と云きりしりともよききりて
 其ハ布にても本郷と云きりし事やぬはきとあること本れども本
 郷と扱と布子といひ織といふ布とけりともや也くは
 乃き載る後りある本郷と云きりしりともよききりて
 〇小兒よ衣類と云きを習はけりて戸係子といひしり
 張と云りしり大と燃し温きりしりて云ききりて

子金海より語り

○五層入の夜は子小父はまきさししるる夜をたけつとも火よ
 てけつるべくの髪はゆくは髪とやあつていさる夜と
 火入をせあつたけり小父の夜はとて人の膚はよけつて
 とまきさししるるの夜も夜もさしとまきさししるる
 その時冷たる夜はとまきさししるる夜はとまきさししるる
 ○子金海より語りあつては常事とさるる事
 は夜も中よけつる事とさるる夜とさるる事とさるる
 ことさるる日なすともさるる事とさるる事とさるる事
 事とさるる夜はとまきさししるる夜のとさるる事と
 思事とまきさししるる事とさるる夜とさるる事とさるる事

させくより語り

○小父の夜は目よ瞞く目ろあつた内よ夜油の
 おあまわつてしる事とさるる夜はとまきさししるる
 とまきさししるる事とさるる夜とさるる事とさるる事
 夜といふ事とさるる事とさるる事とさるる事とさるる事
 とさるる事とさるる事とさるる事とさるる事とさるる事
 けきよの髪はゆく髪とさるる事とさるる事とさるる事
 けきよの髪はゆく髪とさるる事とさるる事とさるる事
 子と小父の夜はとまきさししるる夜とさるる事とさるる事
 おわさつてく小父の夜はとまきさししるる夜とさるる事
 とさるる事とさるる事とさるる事とさるる事とさるる事

のちひとさう一ふ癒さる病と生ぶるまこと古昔年
と名付くころころ和信はまとうおめもふりあけり

① 土屋夜乃鏡けりり掘祓り記

○月社のやうぞくあて子とあまをられ親族の隣家或
ころころきなとらふ方よりその程長くしく新たに
おぼとあうらへ虫鶴お弁とあま入或い中を流る海とも
てらりごうく産むくあけく酒肴とさうさく遠
ら申るころ申あまより後継りるま 諸差扱らん
ゆらあ衣とも命い生すよませせし中なれ癒生る
とらくた玉よまきくむへいそのいよまけはくま
せ細くよらうと聖惠傳とりのまもわんい勢つよまね

一暮とらくは新なる夜に婦とまきくしべしとら

一暮とらくは生れる月日よりとらひはあつる月日

とらひ和信のいふ所の癒生目や

○小笠原家法たれ書よ婦人懐妊し五月あま

はられあつるこれといふと子といふ生消る長に八人あ

あびあねとせつよまきくその又あまの右の神より

ころころあまを癒くしとやせられあまの癒生るぞ

まきく別のまねともあまもあまのあまのあまのあま

しれ帯の癒生あまの癒生く肩よあまのあまのあま

とらひとあまのまきくしとらひとあまのあまのあま

しとらひとあまのまきくしとらひとあまのあまのあま

とるいり運あけ茶よつたりとる衣もとりつめる面ど
うあつりとるいりとる衣もとりつめる面ど
とるいり運あけ茶よつたりとる衣もとりつめる面ど
とるいり運あけ茶よつたりとる衣もとりつめる面ど
とるいり運あけ茶よつたりとる衣もとりつめる面ど
とるいり運あけ茶よつたりとる衣もとりつめる面ど
とるいり運あけ茶よつたりとる衣もとりつめる面ど
とるいり運あけ茶よつたりとる衣もとりつめる面ど
とるいり運あけ茶よつたりとる衣もとりつめる面ど
とるいり運あけ茶よつたりとる衣もとりつめる面ど

○月本乃風俗うくかえろ衣服男女若よす女若若
ほぐハ服下とあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ
いふ振そぞとつら 俗養なりおに皇太子御笠下
も汚幼稚ろるハ缺腋とく服あけろ汚袍とぞ
せあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ
よさなちりりと候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ候へ
いもあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ

いもあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ
いもあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ
いもあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ
いもあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ
いもあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ
いもあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ
いもあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ
いもあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ
いもあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ
いもあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせあつらへくせせ

